

## 紫の上と「物語」との対照

—『源氏物語』の中の「物語」をめぐって—

小泉 咲

## はじめに

『源氏物語』の中には、語り手を含む作中人物たちが、物語内の事象と既存の物語作品とを対照して捉える場面がある。『源氏物語』という「物語」の中での出来事について、作中人物たちが「物語のようだ」あるいは「物語とは違う」などと受けとめることを、どのように捉えるべきだろうか。本稿では、このように作中人物の言葉として、作中の出来事と既存の物語作品が対照される例に注目する。勿論、直接的に「物語のようだ」とは言わずとも、既存の物語作品あるいは和歌からの引用を示す要素がちりばめられた場面や、あたかも引用の元となった作品に関してヒントを出すかのように物語作品名が示される場面は多数見られ、それらの場面も重要な意味を持つと考える<sup>1)</sup>。ただし、物語内のある事象に対して、読者が既存の物語作品を想起することができるというだけでなく、作中人物た

ちまでもが物語作品と対照して受けとめる場面は、『源氏物語』において「物語」というものがいかに扱われているのかが、より明確に示されている箇所なのではないかと考え、本稿において特に検討の対象とすることにした。

このような「作中の出来事と物語作品が対照される例」は、稿者が確認した限り、『源氏物語』正編に一六例、続編に一二例程が見出される<sup>2)</sup>。物語内のある事象に対して、語り手が既存の物語作品と比べる言葉を述べたり、作中の人々が「物語によくありそうなことだ」と言ったりする場面が該当する。例えば、落葉の宮と母御息所の隠し事一つしない仲睦まじさを、語り手が「よその人は漏り聞けども親に隠すたくひこそは昔の物語にもあめれど」(夕霧④四一四)と比較したり、頭中将が夕顔の家を訪ねた時のことを「昔物語めきとおぼえはべりし」(帚木①八二二)と述べたりするような例である。これには具体的な物語作品名や登場人物の名前が示されるような場合と、概念化された物語一般のイメージを想起させるような場合が

ある。本稿において稿者が注目するのはどちらかと言えば概念化された物語一般と登場人物との関わり方であるのだが、そうした「物語」一般のイメージを支えるものとして、具体的な物語作品及びその内容についても同等の注意を払ってゆきたい。

こうした表現について、『源氏物語』全体での傾向を見ると、その対象に無情物は入らないようだ。人々の関係性や状況といったものがいかにも典型的な有様であるようなことを表す場合に、具体的な物語名ではなく「物語のようだ」と一般化した表現として用いられる例が多い。他にも、「賢木」巻における源氏と六条御息所の野宮での別れの場面では、物語作品らしいとは言われないものの、「ことさらに作り出でたらむやうなり」とされる等（賢木②八九）、あまりに出来過ぎた状況を描写する際に類似の表現が用いられる。なお、先行する長編物語である『落窪物語』や『うつほ物語』には、このような既存の物語作品と比較する表現が少なく、このあたりから『源氏物語』の新しく描こうとしたのがみえてくるのではないかと推測する。

こうした「作中の出来事と物語作品が対照される例」について検討するにあたり、本稿では紫の上を手がかりとする。確認した限り、紫の上、そして夕顔と玉鬘は、他の女君に比べて「物語」という語と関わる例が多い。ただし、夕顔と玉鬘の例は、登場場面が限られるという都合もあり、そうした例も「帚木」と「夕顔」巻、「玉鬘」巻「蛭」巻に集中している。紫の上は正編全体に登場する女君であ

ることに加え、生涯の要所と言いうるポイントで物語作品と対照される例が見受けられるのである。

ここで、紫の上のあり方と既存の物語作品との対照が示される例について簡単に押さえつつ、関連する先行研究について確認したい。

第一に、「賢木」巻で紫の上が源氏と結ばれたことが世間に知られた際に、「物語に作り出でたるやうなる」有様と評される場面がある。この評言は、諸注釈書の注でも指摘されるように、幼少期の紫の上の物語が継子いじめの物語の展開を誇張したような結末に至ったことを示している。幼少期の紫の上については造型上の問題点も議論され<sup>4)</sup>、秋山「一九六四」は、「物語にことさらに……」と、作者はわざわざことわらないではいられないのだが、それは紫上が現実に生きる血の通った女性像とは程遠いためである」とする。

第二に、「蛭」巻で彼女が「紫の上」と初めて呼称される場面である。その場面で紫の上は、手にした物語作品をきっかけに自らの幼き日の姿を思い出している。東原「二〇〇四」は、紫の上が物語に「幼女時代の自己を同化・投影」とするということ、まさに「その場面において「紫の上」と呼称されている」点を指摘し、「まことに暗示的」と示唆している。またその直後の場面では、紫の上は明石の姫君に与えるための物語作品の選別に積極的に関わっていてもいる。

第三に、いわゆる第二部の紫の上についても、彼女が自分自身のあり方と物語作品とを対照する場面が見られる。「若菜下」巻においては、源氏の夜離れが続くある日、紫の上は女房たちに「物語」

を読ませ、「昔語り」にも自分のような存在を見出しがたいことに思い至った後に発病し、重体に陥る。この一連の場面について、倉田「一九八八」は、紫の上が「歌語りの世界とは隔絶した自己の境涯を発見していくのであり、「昔語り」的なものからの決別が古歌によることで可能であった」と指摘する。原岡「二〇〇八」は、「女房たちに読ませた「物語」に導かれるように」紫の上は発病に至り、「もの思ひ」と病、そして死という文脈が、紫の上をめぐってここに引き絞られた」と位置づけている。また神田「二〇二〇」は、紫の上の手習に注目する中で、「紫の上はもはや手習をすることもないが」、自身の問題を見つめる際に「物語の言葉という外部が自己発見のための契機たり得ている」と指摘している。

このように三つの場面それぞれについて、先行研究において重要な指摘がなされている。しかし、そもそもなぜ、あえて紫の上の在り方と物語作品とを対照する様が繰り返して、それも紫の上について語る物語内容の重要なポイントと言いうる三つの場面で描写されるのだろうか。ここぞという場面で、思い悩むだけではなく、あるいは手習によって自らの心を見つめようとするのでもなく、「物語」を引き合いに出す理由には、未だ検討の余地があると思われる。

そこで本稿では、紫の上のあり方と物語作品を対照することが、『源氏物語』正編の紫の上を中心とした物語の生成にいかに関わってきているのかを、先述した三つの場面を軸として考察する。特に、物語作品と対照される時の紫の上のありようが、どれほど物語作品

と重なるのか、あるいは重ならないのか、また重ならないとすればどのような要素が物語作品との対照の際に引き合いに出されているのかに留意しながら検討を進める。紫の上と物語作品との対照を追いかける検討は、『源氏物語』正編の主要な女君の物語が形作られるにあたって、『源氏物語』がいかにか「物語」なるものを位置付けようとしていたかを追うことに繋がるとの見通しも持っている。

### 一 「賢木」巻の「物語にことさらに作り出でたるやうなる」幸運

本節では、「賢木」巻の紫の上に対する評言を中心に、幼少期の紫の上のあり方が物語作品に重ねられている点について検討する。

①西の対の姫君の御幸ひを世人もめできこゆ。少納言なども、人知れず、故尼上の御祈りのしるしと見たてまつる。父親王も思ふさまに聞こえかはしたまふ。嫡腹ちかひばらの限りなくと思すは、はかばかしうもえあらぬに、ねたげなること多くて、継母の北の方は、安からず思すべし。物語にことさらに作り出でたるやうなる御ありさまなり。

(賢木②一〇三頁)

源氏による盗み出しの末の結婚は、それを継母が妬ましく思うという点まで含めて、既存の継子いじめの物語に重なる。勿論、継母にあたる式部卿宮の北の方による継子いじめは、周囲の人々の危惧として予感されながらも実際には起こらない。また唯一の妻として

生涯愛される継子の姫君たちとは異なり、源氏によって攫われるように結婚したが故の紫の上の苦悩は、その後に『源氏物語』中で語られる通りである。このように、典型的な継子いじめの物語からずらされた新しい展開が多々あるのだが、①の二重傍線部ではあえて強調するように、幼少期の紫の上の有様は、殊更に物語めいたものと受けとめられている。

しかし、二人の新枕が語られる「葵」巻では、紫の上は源氏に対して嫌悪感を抱いていたことが描写されている。

②かかる御心おはすらむとはかけても思しよらざりしかば、などてかう心憂かりける御心をうらなく頼もしきものに思ひきこえけむ、とあさましよう思さる。  
(葵②七一)

少なくともこの時点で、紫の上は源氏に対して嫌悪感を抱いている。「幸ひ」な状況とは言い難い紫の上の思いが示されているのである。

③……女君〔紫の上〕はこよなう疎<sup>と</sup>みきこえたまひて、年ごろよろづに頼みきこえて、まつはしきこえけるこそあさましき心なりけれ、と悔<sup>し</sup>うのみ思して、さやかに見あはせたてまつりたまはず、聞こえ戯れたまふも、いと苦<sup>し</sup>うわりなきものにし結ばほれて、ありしにもあらずなりたまへる御ありさまを、……  
(葵②七六―七七)

傍線部にある通り、源氏と結ばれたことに関して、紫の上は語られる限りでは源氏を「疎み」、そして「悔し」「苦し」と思っており、

自身を「幸ひ」な状況にあるとは考えていない。紫の上と源氏の結婚を「物語にことさらに」作ったかの如き幸せな状態にあるとするのは、それから少し時間を置いてあらわれる、先の本文①にある世間の人々の評価と、少納言の感懐、そして語り手の評言である。

紫の上を「物語」のような幸運を掴んだ女君だとする世間の人々の言葉は、紫の上本人の心とは別に、継子いじめの物語の姫君たちと紫の上を対照しながら、源氏との結婚は紫の上にとって幸福なものであったと了解させてゆく。その後、源氏が藤壺のままならぬ関係故に雲林院に籠った際には、「女君もうち泣きたまひぬ」(賢木②二一八)とあるように、紫の上が源氏を恋しがる姿が語られ、「須磨」巻に至ると、源氏との離別を悲しむ女君としての姿に焦点が絞られてゆく。源氏と紫の上の新枕による不和は、特段の葛藤あるいは和解の描写もなく、いつのまにか解消されているのである。

それでは、紫の上が源氏と結ばれたことを物語作品と重ねながら受けとめているのはどのような存在であろうか。このことに関して注目したいのは、源氏と結婚する以前も、人々が紫の上について語らう様子が点描されてきたことである。本文①の場面で幼少期の紫の上の物語は一旦の区切りを迎えていると受けとめられそうだが、ここで紫の上の「御幸ひ」を確認するのは、「世人」の語らいと、語り手の言葉である。この場面の理解のために、それより以前に点描されていた人々の語らいの確認をしてみたい。<sup>⑤</sup>

次の例は、少納言が紫の上に関する「物語ども」をする場面であ

る。

④少納言は、惟光にあはれなる物語どもして、「あり経て後や、さるべき御宿世すくせのがれきこえたまはぬやうもあらむ。ただ今は、かけてもいと似げなき御事と見たてまつるを、あやしう思しのたまはするもいかなる御心にか、思ひよる方かたなう乱れはべる。……」  
(若紫①二五〇)

この場面の少納言の発言に関して、『新大系』は脚注に、「紫上が将来においては源氏の君の北の方になり申す運命にあるかもしれない、の意」とあり、「暗に源氏に紫上の運命を託すべく少納言の苦心の言葉と態度」と踏み込んだ注を付している。少納言にそのような意図があったかはともかくとして、この場面の「あはれなる物語」の内容は、直接的には示されないが、惟光を通じて源氏の気を引こうと、頼りとなる人を失った幼い紫の上の境遇を切々と訴えかけるものであったと考えられる。

その後、源氏に引き取られた紫の上に関するうわさが広がる様が見て取られる。

⑤……こなたには女などもさぶらはざりけり。うとき客人まろうとなどの参るをりふしの方かたなりければ、男どもぞ御簾の外とにありける。かく人迎へたまへり、とほの聞く人は、「誰ならむ。おぼろけにはあらじ」とささめく。  
(若紫①二五六)

⑥かうやうにとどめられたまふをりをりなども多かるを、おのづから漏り聞く人、大殿おほいどのに聞こえければ、「誰ならむ」「いとめざ

ましきことにもあるかな」「今までその人とも聞こえず、さやうにまつはし戯れなどすらんは、あてやかに心にくき人にはあらじ」「内裏うちわたりなどにてはかなく見たまひけむ人をものめかしたまひて、人や咎めむと隠したまふなり」「心なげにいけて聞こゆるは」など、さぶらふ人々も聞こえあへり。内裏うちにも、かかる人ありと聞しめして、……  
(紅葉賀①三三四)

⑦大将の君の御通ひ所ここかしこと思しあつるに、「この御息所、二条の君などばかりこそは、おしなべてのさまには思したらざめれば、恨みの心も深からめ」とささめきて、……  
(葵②三二)

こうした紫の上への評価の前提には、紫の上が二条院に据えられた源氏の妻妾だとする想定がある。幼少期の紫の上の存在、そしてその言動は、源氏による情報公開より以前に、二条院の人々から左大臣邸、そして桐壺帝へと伝播してゆく。これに並行して人々の話の種となってしまう六条御息所と、よく似た経路を辿って情報が広がるのであった。

人々の憶測に対して、源氏は紫の上のことを「ほかなりける御娘」(紅葉賀①三二七)、「女親なき子」(葵②五八)等と意識して愛おしんでいる。紫の上を藤壺の代わりとしたいという源氏の本来の目的は別として、「葵」巻の新枕以前は、世間の人々の想像と実際の二人の関係は異なるものであり、寧ろこうした世間の人々の言葉は、源氏と紫の上の関係に先行するかのようには語られていたと言えよう。

また、紫の上当人も、少納言から幼い言動を咎められた際には「我はさは男まうけてけり」（紅葉賀①三三二）とは考えているもの、あくまでままごのような子供らしい理解であり、実際のな夫婦の關係は想定できていなかったと思しい。

以上をまとめてみると、世間の人々の語らいにみられた内容は紫の上の実態とは離れたものであり、源氏との實際の関わりに先行するかのよう、紫の上は源氏の妻妾の一人であろうと想定するものであった。先述の通り、源氏は幼い紫の上に男女の關係を強要することはなく、寧ろ娘のように意識する姿の方を示されている。だが新枕後は、それ以上に時間をかけて紫の上の葛藤が描かれるということはない。世間の人々は紫の上の正体（行方不明となっていた兵部卿宮の娘）を知ると共に、継子いじめの物語と対照されながら、その幸福な結末を重ねて紫の上の存在を受けとめる。

このように、紫の上は「物語にことさらに作りいでたるやう」とその有様を評されながら本格的に物語世界内で認知され始めていた。その時点で既に、重ねられた筈の物語作品との差異がほの見えてくる。だがこの時点ではその差異について正面から取り扱われることはなく、ひとまず紫の上は「物語」めいた幸福を得たという印象を付与されながら、源氏の女君として位置づけられてゆく。

## 二 「蜩」巻の「物語」との対照

その後、「蜩」巻において、紫の上のあり方は再び「物語」と対照される。この場面は、源氏が玉鬘を相手に物語について語る場面の直後であり、引き続き明石の姫君のための物語選別が行われる。『源氏物語』中で、紫の上が初めて「紫の上」と呼称されるという点においても、重要な場面である。

⑧紫の上も、姫君の御あつらへにことつけて、物語は捨てがたく思したり。くまのの物語の絵にてあるを、「いとよく描きたる絵かな」とて御覽ず。小さき女君の、何心もなくて昼寝したまへる所を、昔のありさま思し出でて、女君は見たまふ。

（蜩③二二四）

ここで、紫の上はくまのの物語の絵を見ながら、かつての自らの姿を思い起こし、絵の中の「小さき女君」に自身を重ねているようである。

「くまのの物語」なる物語名は他に例が見られず、『枕草子』にも言及のある散逸物語『くまのの物語』と同一であるとの見方が主流である。『くまのの物語』は、本文⑧で「小さき女君」の「昼寝」の場面が描かれていること、及び『枕草子』に「月に昔を思ひ出でて、虫ばみたる蝙蝠かほひ取り出でて、「もと見しこまに」と言ひてたづねたるが、あはれなるなり」（成信の中將は）新全集 四二七頁）

等とあることから、幼恋の物語であったと推定される<sup>(6)</sup>。

ここで注目したいのは、『こまの物語』が幼恋の物語であった場合、その直後の場面である明石の姫君のための物語選別の場面而言及される「この世慣れたる物語」に含まれる点である。それが次の⑨である。ここでは源氏と紫の上が話し合いながら物語作品を評価し、明石の姫君に与える物語作品を選別している。

⑨〔源氏〕「姫君の御前にて、(a)この世馴れたる物語などな読み聞かせたまひそ。みそか心つきたるものむすめなどは、をかしとはあらねど、かかること世にはありけりと見馴れたまはむぞゆゆしきや」とのたまふもこよなしと、対の御方聞きたまはば、心おきたまひつくなむ。上〔紫の上〕、「心浅げなる人まねどもは、見るにもかたはらいたくこそ。(b)うつほの藤原の君のむすめこそ、いと重りかにはかばかしき人にて、過ちなかめれど、すくよかに言ひ出でたる、しわざも女しきところなかるぞ、一やうなめる」とのたまへば、(中略) (c)継母の腹きたなき昔物語も多かるを、心見えに心づきなしと思せば、いみじく選りつつなむ、書きととのへさせ、絵などにも描かせたまひける。

(蜩③二二五―二二六)

傍線部にある通り、明石の姫君に与える物語を選ぶ中で、(a)「この世馴れたる物語」、(b)「うつほの藤原の君のむすめ」、(c)「継母の腹きたなき昔物語」が否定的に評価される。姫君教育における物語の効用も指摘される<sup>(7)</sup>ところである。一方で、この会話ではどのよう

な物語が適切かは示されず、既存の物語の否定的な要素を取り上げることには終始している。

紫の上は⑧に挙げたように、直前で『こまの物語』にかつての自らを重ねていた。ただし『こまの物語』が『枕草子』にあった通り「昔を思ひ出で」た男が女君を訪ねる物語であったとすれば、源氏と紫の上とは異なり、幼き日に関係を結んだものの、一度は別れることとなった男女の物語であったのだろう。他方、(c)「継母の腹きたなき物語」は、継子いじめの物語を指す。第一節で見た通り、これもまた紫の上の来歴と大きく重なる物語であるが、実際にはいじめが発生しない等、異なる点も多いことは確認した通りである。また、継子いじめの物語と重なるのは紫の上だけではない。紫の上(継母)、明石の姫君(継子)という関係に加え、玉鬘も直前の場面で、「住吉の姫君」の境遇に我が身を重ねている。継子いじめの物語が持つ要素は、明石の姫君と玉鬘にも重なり、紫の上に限った話ではない。

それでは、(b)「うつほの藤原の君のむすめ」はどうであろうか。これは『うつほ物語』のあて宮を指している。藤原の君(源正頼)の娘であるあて宮は、多数の男性から懸想されながらも東宮妃として入内する女君である。「藤原の君」という『うつほ物語』序盤で源正頼(あて宮の父)を示す呼び名から、ここでは特に入内以前、多くの男君から求婚されていた頃のあて宮を指しているのだろう。源氏と紫の上の会話の中で批判されるのは、恐らくあて宮の懸想人

たちへの冷淡な対応ぶりである。もつとも、あて宮がゆくゆくは東宮の寵愛を受け、国母となるという筋立てを考えると、入内を望まれている明石の姫君に与える物語の候補となるのも頷ける。

ただし、あて宮が多くての男性の懸想の対象となるという点は、紫の上と玉鬘にも関わる要素であると考えられる。

⑩〔源氏〕「……すき者どもの、いとうるはしだちてのみこのわたりに見ゆるも、かかるもののかきはひのなきほどなり。いたうもてなしてしがな。なほうちあはぬ人の気色見あつめむ」とのたまへば、〔紫の上〕「あやしの人の親や。まづ人の心励まさむことを先に思すよ。けしからず」とのたまふ。〔源氏〕「まことに君をこそ、今の心ならましかは、さやうにもてなして見つべかりけれ。いと無心むじんにしなしてしわざぞかし」とて笑ひたまふに、……  
(玉鬘③ 一三一～一三二)

高木「二〇〇二」が「玉鬘を六条院の「くさはひ」とする処遇が、若き日の紫の上に起こり得た一つの可能性、とにおわせている」と指摘するように、源氏は玉鬘を「くさはひ」として男君たちの懸想の中心に置こうと計画し、それを紫の上に語る中で、かつての紫の上をこそそのようにすべきだった、と冗談めかして話す。紫の上もまた、あて宮の如く懸想の中心に置かれる可能性があったのである。以上のようにみえてくると、これら(a)(b)(c)三つの物語作品は、紫の上のありえたかもしれない物語を仄めかすものとも捉えうるのではないだろうか。幼恋の要素、多くの男性たちの懸想の中心に置かれ

る可能性、意地悪い継母の存在という要素は、紫の上の生涯と対照してみた時、重なる要素を持つと言える。ただし、一節で見た通り、当初紫の上は源氏との結婚に苦しみながらもそのまま結婚生活を続け、また将来的には継子いじめの物語の継子たちのような幸福は得られない。男性たちの懸想の中心に置かれる様は、あくまで、そうなりえたかもしれないという冗談めかした可能性として示されている。

いずれの物語も、否定的な評価を伴い、また特に『こまの物語』は紫の上の生涯と対照するかたちで示されながらも、完全に重なりきることはないという点を押さえない。

### 三 「若菜下」巻の発病前夜の「物語」

その後「若菜下」巻において、紫の上は発病し重体に陥る前夜、女房たちに物語作品を読み上げさせる。女三の宮の六条院入りに始まる紫の上の苦悩が頂点を迎える場面であるとも言えるだろう。まさにその場面において、紫の上は彼女自身の心中に密着した語りの中で、自らの有様と物語作品とを対照している。それが次の⑪である。

⑪対には、例のおはしまさぬ夜は、宵居したまひて、人々に物語など読ませて聞きたまふ。かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語りどもにも、あだなる男、色好み、二心ふたこころある人にかかづらひ

たる女、かやうなることを言ひ集めたるにも、つひによる方ありてこそあれ、あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな、げに、のたまひつるやうに、人よりことなる宿世すくせもありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらん、あぢきなくもあるかな、など思ひつづけて、夜更けて大殿籠りぬる暁方より、御胸をなやみたまふ。

(若菜下④二二二)

源氏の夜離れが続く中、紫の上は女房たちに読ませた物語作品と自らの生涯を比べて思い悩む。紫の上は、既存の物語作品に自らの境遇を重ねながらも、結局は物語作品の女君や男君とは全く違う状況になり果てた源氏と自らの仲を痛感し、発病へと至る。ここで意識されているのが、物語作品との重なりよりも寧ろ差異であることは明らかである。

なお、物語作品と対照する例とは異なるものの、次の⑫もあわせて確認しておきたい。源氏と女三の宮の新婚の夜、紫の上が自身の不安な心境を押し隠し、女房達を諫める場面である。

⑫年ごろ、さもやあらむと思ひしことどもも、今はとのみもて離れたまひつつ、さらばかくにこそはと、うちとけゆく末に、ありありて、かく世の聞き耳もなのめならぬことの出で来ぬるよ、思ひ定むべき世のありさまにもあらざりければ、今より後のちもうしるめたくぞ思しなりぬる。さこそつれなく紛らはしたまへど、さぶらふ人々も、「思はずなる世なりや」「あまたものしたまふ

やうなれど、いづ方も、みなこなたの御けはひには方避り憚るさまにて過ぐしたまへばこそ、事なくなたらかにもあれ」「おし立ちてかばかりなるありさまに、消たれてもえ過ぐしたまはじ」「またさりとて、はかなきことにつけてもやすからぬことのあらむをりをり、かならずわづらはしきことども出で来なむかし」など、おのがじしうち語らひ嘆かしげなるを、つゆも見知らぬやうに、いとけはひをかしく物語などしたまひつつ、夜更くるまでおはず。

(若菜上④六五〜六六)

この場面では、二重傍線部で紫の上の人が「物語など」をしている。紫の上が語る「物語など」は、具体的な内容を想定しがたい。なにかの世間話としか取りようがないものの、紫の上が直前の女房たちの発言（破線部）に対して知らぬふりをして見せることから、恐らくは悩みなど何もないかのように見せかけるための世間話であろう。少なくとも、この「物語など」の内容は、紫の上の不安な心中とはかけ離れたものとなつていと推測される。

冒頭に示される紫の上の内心に密着した語りと比較すると、破線部に見られる女房たちの言葉こそが、紫の上の本心を言い当てかねない状況であると言えよう。彼女が物語作品と自らのあり方の差異を認識するに至る過程において、本心とは離れた「物語など」を語る姿を描かれていることにも留意しておきたい。

遡って考えると、紫の上は幼少期の終わりには「物語にことさらに作り出でたるやう」な存在として人々から認知され始めていたわ

けだが、この時紫の上のあり方を物語作品と対照しながら受けとめていたのは彼女自身ではなく世間の人々であり、寧ろその時点において紫の上は源氏との関係に複雑な心情を抱いていた。この「若菜」上下巻においても、紫の上への評価として次のような世間の人々の言葉が示されている。

⑬さて後は、常に御文ふみ通ひなどして、をかしき遊びわざなどにつけても疎とからず聞こえかはしたまふ。世の中の人も、あいなく、かばかりになりぬるあたりのことは、言ひあつかふものなれば、はじめつ方は、「対の上〔紫の上〕」いかに思すらむ」「御おほえ、いとこの年ごろのやうにはおはせじ。すこしは劣りなん」など言ひけるを、いますこし深き御心ざし、かくてしもまさるさまなるを、それにつけても、またやすからず言ふ人々あるに、かく憎げさへなく聞こえかはしたまへば、事なほりてめやすくなんありける。

(若菜上④九二)

紫の上が苦しみ押し隠して作り出した「めやす」い状態が、世間の人々の言葉によって了解されている。幼少期の「物語にことさら作り出でたるやうな御ありさま」から、物語作品と対照して自らを「あやしく浮きても過ぐしつるありさま」と思う姿と並行するかのように、理想的な紫の上のあり方が語られているのではないだろうか。当初より、紫の上のあり方と物語作品が対照される際には、その間にあるずれも併せて確認することができた。それに並行して、物語作品の結末のように収まりの良い状態にある紫の上の姿も、世

間の人々からの評価として語られている。「若菜」上下巻の場合は、世間の人々は物語作品と紫の上のあり方に類似を感じているというわけではないが、少なくとも、紫の上のあり方は、既存の物語作品といかに類似するかを意識させるだけではなく、むしろ、物語作品から外れたところにいる紫の上を浮かび上がらせている。

そうして浮き上がって来た物語作品との差異は、物語作品の中では語りきれずそこから外れてしまう部分があるということまでも示すのではないだろうか。それは例えば、継子いじめの物語の姫君が男君との結婚に対して葛藤を抱き拗ね続けて、物語の展開として収拾をつけられないまま締まりのない状態に陥ってしまうような状況は、物語作品においては描きにくいといった側面であろう。引用されている先行作品を否定することによるリアリティが看取される。紫の上の生涯は、作中の人々にとってはいかにも「物語」らしいものと受けとめられながらも、その中に語られずこぼれ落ちたものがあることは、彼女の心中に密着した語りにも読者には察せられるだろう。

源氏と結婚した際の紫の上の苦しみは、基本的には世間の人々による「幸ひ」な状況の確認の方が印象深く語られるが、後年は、彼女をめぐる状況を「めやす」いものと評価する世間の人々の語らい、そして女房たちに読ませた浮気な男の物語の結末と、紫の上が置かれた状況とが大きく異なるものであることは、彼女自身の心中に密着するかたちで詳述される。このように紫の上を手がかりとして、

そのあり方と物語作品とが対照される場面を追いかけると、彼女の場合は展開上の重要なポイントと言ってよい場面において、あえて物語作品と微妙に重なりきることのできないあり方を意識させているようである。このことは、物語作品が語りきれないものを暗示し、「物語」それ自体の限界を明らかにしてゆくことをも意味するだろうか。

#### 四 まとめ

『源氏物語』には、作中人物のあり方が既存の物語作品と対照される例が見られる。本稿では、紫の上を検討の手がかりとして追い、物語作品との対照が、紫の上を中心とした物語の生成にいかに関わってきたのかを考察しようと試みた。

第一に、幼少期の紫の上が源氏と結婚した際、その幸福は「物語」に作り出でたるやうなものであったと評される。そのことは、既存の物語作品（特に継子いじめの物語）の展開と幼少期の紫の上の物語の展開が重なることを強調していると捉えられてきた。一方、幼少期の紫の上に関して人々が取沙汰する場面もたびたび語られる。その内容は紫の上を源氏の妻妾の一人であると想定したものであり、その時点での紫の上の実態とは異なるものであった。紫の上は世間の人々の言葉によって、殊更「物語」らしい幸福を得た存在として位置づけられている。

第二に、「蜜」巻においては『こまの物語』と思しき物語を自らの幼き日の姿に重ねている。この物語は、初恋の物語であったと推定される。その直後、明石の姫君のための物語選別の際には「この世馴れたる物語」、「うつほの藤原の君のむすめ」、「継母の腹きたなき昔物語」が否定的に評価される。これらはいずれも、幼い姫の恋物語であるという点、男たちを集める「くさはひ」となる女君が登場する点、継母による継子いじめの物語であるという点において紫の上に重なる要素を有しているものの、紫の上の生涯はそうした物語作品と異なる筋道を辿っている。

第三に、「若菜下」巻では女三の宮の六条院入り後、発病前夜の紫の上は女房達に物語を読ませており、物語の中の女君たちと自らの差異を強く意識している。殊更に「物語」らしさを強調された筈の女君が、話が展開するにつれ「物語」の枠から外れていってしまうかのようなのである。関連する例として取り上げた「若菜上」巻の本文<sup>⑫</sup>では、紫の上は源氏と女三の宮の新婚の夜、「物語など」をして過ごしているが、この「物語」は、紫の上が心中の悩みを隠すために語ったものであり、紫の上の本心とは異なるものであったと推測される。またその周囲には、紫の上と女三の宮の関係を取沙汰し、「めやすし」と評価する世間の人々の語らいも示されていた。

紫の上のあり方と物語作品とが対照される時には、彼女のあり方が物語作品といかに類似しているかを強調するよりも、そこから外れたところにいる紫の上の姿をあらわにしているようである。その

周囲には並行するように、彼女の心中から外れた紫の上のあり方について取沙汰する世間の人々の言葉があり、その中で示される「幸ひ」「めやすし」といった評価が、紫の上の理想的な在り方として作中の人々に受けとめられてゆく。すると、幼少期の紫の上の「物語」を作り出でたるやう」な有様という語り手の評言は、継子いじめの物語を示唆するのにとどまらず、晩年に至るまでの紫の上のあり方に関わるものとして、より重要なものと位置づけられよう。

以上、「物語」の内に、「物語」らしく作られたかのようだと明示される紫の上が、却って「物語」が語ることできていない部分をあらわにするという構図を捉えてみた。

なお、このことは、紫の上の死後、「幻」巻において、残された源氏と紫の上付きの女房たちの対話が「いにしへの物語など」と表現されることと無関係ではないと思われる。

⑭つれづれなるままに、いにしへの物語などしたまふをりをりも  
あり。なごりなき御聖心の深くなりゆくにつけても、さしもありはつまじかりけることにつけつつ、中ごろもの恨めしう思したる気色の時々見えたまひしなどを思し出づるに、などて、たはぶれにても、またまめやかに心苦しきことにつけても、さやうなる心を見えたてまつりけん、何ごとにもらうらうじくおはせし御心ばへなりしかば、人の深き心もいとよう見知りたまひながら、怒じはてたまふことはなかりしかど、一わたりづつは、いかならむとすらんと思したりしに、すこしにても心を乱りた

まひけむことのいとほしう悔しうおぼえたまふさま、胸よりもあまる心地したまふ。そのをりの事の心をも知り、今も近う仕うまつる人々は、ほのぼの聞こえ出づるもあり。

(幻④五二二・五二三)

紫の上と「物語」との関係は、「幻」巻においても意識させられる。⑭の「いにしへの物語など」の内容は、生前の紫の上の様子、そして密着するように語られてきた紫の上の心情と大きな齟齬はきたしていない。この⑭の場面の眼目は悲しみに暮れる源氏を中心に描くことであるのだが、「いにしへの物語」の中身はあくまで源氏が女房たちを相手に、生前の紫の上の姿を思い返して共有するものである。そこにはこぼれ落ちた紫の上の心情があつたであろうことを予感させ、恐らく悲しみの中で相当に美化されているであろう紫の上に関する物語のリアリティのなさ、空虚さが暴かれかねないものであるとも思われる。そして以下は今後の展望として示すに留めるが、そうした女房たちの残した言葉こそが『源氏物語』の根底を支えるものの一つであるとするならば、<sup>8)</sup>「物語」においては語りきれない紫の上のあり方が、彼女らの語る「物語」への疑念をも呼び起こしかねないと推測する。

紫の上の物語は、『源氏物語』以前の既存の物語作品と対照されることを通して、その枠組みを超え、更には『源氏物語』の作中世界において人々が語る「物語」——すなわち、『源氏物語』を支える「物語」からも、完全に捉えきることのできないものがあるとい

うことを、暗示しているのではないだろうか。

注

(1) たとえば、「蓬生」巻で「からもり」なる物語を見る末摘花の姿である。石川「一九五八」はその内容を「竹取物語に似た神仏譚風の物語で、ただそのヒロインが「かたは人」で、千辛万苦の末目的の家に辿り着いた懸想人の失望落胆いかばかりといふ落ちのついた可笑味の勝った物語」としている。稿者としても、『からもり』物語は末摘花の物語と関係するからこそ、あたかもヒントのように作品名が出されたのだと考える（なお、この点は小泉「二〇一七」にて検討した）。

(2) 正編の各巻ごとの数を示すと、「桐壺」一場面、「帚木」一場面、「夕顔」一場面、「若紫」一場面、「末摘花」二場面、「賢木」二場面、「蓬生」一場面、「少女」一場面、「胡蝶」一場面、「蛭」三場面、「若菜下」一場面、「夕霧」一場面、と全体に分布していることが確認される。また「末摘花」「蓬生」巻の双方にこうした例が見られるのは、この二つの巻の短編的なまとまりのある性格と関わる可能性があるかもしれない。なお、『源氏物語』内で端役の扱いを受ける人々のありようと既存の「物語」を重ねる例は見つけることができなかった点も留意される。

(3) 確認の限り、『落窪物語』における交野の少将への言及の他、『うつほ物語』では俊蔭母の和歌集が「ただ、ありつることを、物語のやうに書き記しつづ、その折の歌どもをつけたり」とされる例が見いだされる（蔵開中「五四八頁（室城秀之校注『うつほ物語全改訂版』おうふう、二〇〇一））。

(4) 秋山「一九六四」は、「紫上という人物は生きた人間としての内面的な統一性をもつとはいえないであろう」と断じている。森野「一九九六」は、幼少期の紫の上については「むしろ、〈少女〉でもあり、〈女君〉でもあるといった、混淆した状態」を捉えられると指摘する。なお、川名「二〇〇

五」は源氏が与えた物語に注目し、その内容が「美しい姫君が貴公子に求愛され、幸福な結婚をするというごく単純な恋物語であった」ことを推定した上で、「源氏は自分たちの関係もまた破綻のない幸福なものであることを暗に若紫に教え込んでゆくのである」とした。

(5) なお、幼少期の紫の上に関わる世間の人々の語りについては、秋「二〇〇五」が「葵上の側近にとつて、若紫は無視できない恋敵ではあったものの、世間にとつてそれは「情報価値がある内容」ではなかった」として、「若紫は、世間の〈うわさ〉を担うほどの存在性をまだ確保していない」と位置づけているものの、従来はほぼ論の対象とはなつてこなかった。なおこの引用文においては安藤「二〇〇六」（初出は二〇〇四）が示した「情報価値のある内容が「もの言ひさがなき」世の人々の伝達経路に接触した時、〈うわさ〉は「おのづから」広がるものだ、というのが「源氏物語」の物語社会における基本的な〈うわさ〉認識である」という定義が踏まえられている。

(6) 玉上「一九六五」が、「こまの物語」は「幼いころ恋し合った二人が、何かのついでで結ばれないまま年を経た後、男が月をながめていて女をしのび、思い出の扇の、古くむしばんだのを探し出して、女を訪ねてゆく決心をしたというような筋であったか」と推定している。

(7) 工藤「二〇一四」は、この場面で「物語の教育的効用を主張しているのだと見なすこともできよう」と指摘している。また、伊井「二〇〇三」は明石の姫君と玉鬘に与えられた物語の違いから、「内容のそれぞれ異なる姫君教育、それは明石姫君と玉鬘との光源氏の娘としての役割の違いであった」とする。

(8) 三田村「一九九六」は、この「幻」巻の源氏と女房たちの会話について、「紫上に身近に仕えたが故に、紫上生前の「語り手」である彼らは、〈語り〉の内包する距離と同一化の幻想を、光源氏のお手つきである自らの心と体に刻み込むように所有してきた存在」であるとして、「幻巻の主人公と「語り手」との対話は、差別を刻印された、召人の、「しるしつき」のまなざ

しによつてこれまでの物語の大半が支えられてきたことの痛切な確認作業  
だったのだと言えよう」としている。

\*『源氏物語』の引用本文は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校  
注・訳『新編日本古典文学全集20 源氏物語①』〜『新編日本古典文学全  
集25 源氏物語⑥』小学館（一九九四〜一九九八）に依拠している。ただ  
し、他の注釈等を参照し、一部私に表記をあらためた箇所がある。

\*『源氏物語』本文の異同に関しては、池田亀鑑『源氏物語大成』中央公論  
社（一九五三〜一九五六）、源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集  
成』桜楓社（一九八九〜二〇〇二）、源氏物語別本集成刊行会編『源氏物  
語別本集成続』おうふう（二〇〇五〜二〇一〇）、加藤洋介編『河内本源  
氏物語校異集成』風間書房（二〇〇二）、及びウェブサイト「加藤洋介・  
校異集成（稿）」([http://www.2kansai-u.ac.jp/ok\\_matsu/](http://www.2kansai-u.ac.jp/ok_matsu/))より「源氏物  
語校異集成（稿）」を参照した。

\*『源氏物語』中の用例数については、池田亀鑑編著『源氏物語大成』中央  
公論社（一九五三〜一九五六）、平安文学ライブラリー（日本文学学会図  
書館）、「古典総合研究所」（上田英代、<http://www.genji.co.jp/>）を併用し  
て確認した。

#### 引用文献

秋山 虔「一九六四」 「紫の上の初期について」『源氏物語の世界』東京大学  
出版会

安藤 徹「二〇〇六」 「おのづから」の物語社会『源氏物語と物語社会』森  
話社

伊井春樹「二〇〇三」 「絵物語の製作とその享受——『源氏物語』螢巻におけ  
る物語論への視座——」『物語の展開と和歌資料』風間書房

石川 徹「一九五八」 「竹取から宇津保の頃までの物語に就いて」『古代小説  
史稿——源氏物語と其前後——』刀江書院

川名淳子「二〇〇五」 「雛」の形態、遊戯の形——「作り出でたる」人形の  
独自性」『物語世界における絵画的領域 平安文学の表現方法』星雲社

神田龍身「二〇二〇」 「晩年の紫の上」『平安朝物語文学とは何か——「竹取」  
『源氏』「狭衣」とエクリチュール——』ミネルヴァ書房

工藤重矩「二〇一四」 「螢巻の物語論義——「そらごと」を「まこと」と言い  
なす論理の構造——」『平安朝文学と儒教の文学観——源氏物語を読む意  
義を求めて——』笠間書院

倉田 実「一九八八」 「紫の上の述懐」『紫の上造型論』新典社

小泉 咲「二〇一七」 「源氏物語」『蓬生』巻にみえる「物語」——古物語と  
老女房の関わりに注目して——『平安朝文学研究』復刊二五 平安朝文  
学研究會

高木和子「二〇〇二」 「玉鬘十帖論」『源氏物語の思考』風間書房

玉上琢彌「一九六五」 『源氏物語評釈』第五卷 角川書店

秋 貞淑「二〇〇五」 「生霊を生み出す表現世界——氾濫する（うわさ）の様  
態——」『人物で読む『源氏物語』第七卷 六条御息所』勉誠出版

原岡文子「二〇〇八」 「紫の上の「祈り」をめぐって」『源氏物語』に仕掛け  
られた謎——「若紫」からのメッセージ』角川学芸出版

東原伸明「二〇〇四」 「紫の上終焉の（語り）と（呼称）——共感する語り手  
の（声）・「紫の上」「若菜」へ——」『源氏物語の語り・言説・テキスト』  
おうふう

三田村雅子「一九九六」 「召人のまなざしから」『源氏物語 感覚の論理』有  
精堂

森野正弘「一九九六」 「紫君と雛遊び・絵——末摘花巻の時間と言語」『源氏  
物語の音楽と時間』新典社